

斉彬なきあと、薩摩藩を実質的に継いだのは  
保守派で斉彬の腹違いの弟、島津久光であった。  
兄斉彬との兄弟仲は悪くなかった。  
斉彬の遺志は、藩の現状を考え、久光の子忠義を世継ぎとし、久光はその後見人という形をとる  
ことであった。  
久光は兄の言うとおりにしている。  
兄の政治的野心も、本人としてはそのまま継いだつもりであった。  
久光には久光なりの素養はある。  
幕府軍艦奉行、勝海舟が咸臨丸で薩摩に回航した折り、斉彬は弟久光のことを次のように紹介し  
ている。  
「彼、幼より書を好む。今にして博覧強記、我が及ばざる処、また志操方正厳格、是もまた、我  
に勝れり」  
英雄肌の斉彬に、こうまで言わせている。

生まれた時期が違えば久光も又、賢候の一人に数えられていたかもしれない。  
ところが、西郷はこの久光を認めていない。  
一つには、久光の母お由羅が久光を藩主にしたいがため、世子だった斉彬並びにその子達を呪詛  
により殺そうと謀ったらしいこと。  
また過去、斉彬擁立派だった高崎ら開明の士が、  
斉彬の洋癖を危ぶみ、久光を重んずる藩候の父斉興により峻烈な肅正にあったことが挙げられる。  
西郷は、文久2年、久光が上洛について意見を徴するために引見した折、  
言葉は丁寧だが、あなたには幕政改革は無理としたうえ、  
久光のことを正面切って「ジゴロ（田舎者）」と罵っている。

封建の世にあって一下級藩士が藩主の出来が良いの悪いのと言葉に出すなど、気狂い沙汰である。  
まわりの者はさぞびっくりしたのではないか。  
西郷にはそういうところがある。  
「西郷隆盛の思想」の著者、上田滋氏は西郷の性質の根の部分について次のように分析している。

「...私が特に強調したいのは  
「**道義によって生きる人格に自らを為らせたい、とつねづね願い努めていた**」  
ということは、彼は生来の素質が決してそうした  
「**道義の人**」ではなかったことを示すものであろう。

彼は、もともと多情多帳の面をさえ持つ

「**南海の熱血児**」である